

volume
109

MARCH
2009

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



中央が県立大学
右上は県立美術館と県立中央図書館

●CONTENTS●

第8回日中健康科学シンポジウム	1	・企業技術交流会を開催	16
男女共同参画推進センターの設立	3	・第6回しずおか環境・森林フェアへの出展	17
現代韓国朝鮮研究センターが学術交流協定を締結	3	・静岡環境フォーラム21を開催	17
新型インフルエンザの公開講演会を開催	4	研究助成採択	18
国際室内環境シンポジウムを開催	4	受賞	19
グローバルCOEプログラム		活躍する卒業生・修了生	21
・「第1回国際健康長寿科学コンファレンスー薬食同源ー」の開催	5	卒業生によるキャリア講演会を開催	24
・静岡健康・長寿プレフォーラム2008	6	奨学寄附金をいただいた生塩さんに感謝状授与	24
・第13回静岡健康・長寿学術フォーラム	6	地域に貢献！学生による健康教室を開催	25
・グローバルCOE科学英語プログラム	7	3-A-Day実践・推進セミナーを開催して	25
「世界各地の食事に学ぶフード・セキュリティの未来」を開催	9	新学長就任	26
スルガ銀行ビジネスセミナー「静岡でビジネス改革を考える」を終えて	9	教員人事、名誉博士・客員教授の紹介	26
フランスだより〜リール政治学院交換留学中間報告〜	10	教員の著書紹介	26
日本EU学会研究大会の開催	11	図書館だより	27
日本医療・病院管理学会学術総会を開催	12	北京パラリンピックへの出場	29
ホスピタル・プレイ・スペシャリスト（HPS）英国実習報告会	13	サークル紹介	30
第5回「看護と社会」研究全国集会開催される	14	新入生歓迎委員会の活動について	31
産学民官連携		2009年開学記念行事開催のお知らせ	31
・「産・学・民・官」の連携を考える集い」を開催	15		

第8回日中健康科学シンポジウム開催される

日中健康科学シンポジウムは平成5年にスタートし、隔年に日中交互に開催されてきました。第8回目は浙江省医学科学院の主催で、平成20年11月17、18日に浙江省杭州市のVaton Yunqi Resort Hotel（華庭雲栖度假酒店）にて開催されましたが、今回から、より発展させた国際シンポジウムとなり、本学、浙江省医学科学院、浙江大学に加え、韓国、タイ王国、マレーシアの大学からも大学院生を含む多数の参加がありました。本学からは、西垣克学長（当時）、木苗直秀副学長（現学長）を含めた10名の教員と、グローバルCOEの一環としてオハイオ州立大学での科学英語コミュニケーション演習を修了した博士後期課程在籍者6名（薬学研究科4名、健康科学研究科2名）、事務職員1名の総勢18名が参加しました。

2日間で30演題の口頭発表と41演題のポスター発表がありました。新興感染症や認知症に効く天然物や、抗酸化、抗癌、抗炎症、免疫調節などの作用を有するタイ産ハーブなどの本学のプロジェクトと関連の深い成果をはじめ、幅広い第一線の研究成果発表に大変活発な討論がなされました。また、本学院生の研究成果発表や質問に堂々と答える様子に、海外での語学研修の重要性を再認識しました。

次回は来年（平成22年）に本学が主催します。



討論する木苗副学長（現学長）



口頭発表する鈴木隆教授

名誉博士号ならびに客員教授の称号授与式

薬学部 教授 鈴木 隆

第1日目のシンポジウム終了後に、本学と浙江省医学科学院の間で名誉博士号と客員教授の称号授与式が行われました。西垣克学長（当時）から浙江省医学科学院の毛江森（Mao Jiang-sen）名誉院長と陳國神（Chen Guo-shen）同名誉院長に静岡県立大学名誉博士の称号が授与されました。また、浙江省医学科学院 沈正栄（Shen Zheng-Rong）教授、郭潮潭（Chao-Tan Guo）教授、鄭高利（Zheng Gaoli）教授、張幸（Zhang Xing）教授・同院長に静岡県立大学客員教授の称号が授与されました。さらに、浙江省医学科学院の張幸院長から、木苗直秀副学長（現学長）、奥直人薬学部長、野口博司教授ならびに私（鈴木隆）に浙江省医学科学院客員教授の称号が授与されました。



西垣学長（当時）から張幸院長への客員教授称号の授与

第8回日中健康科学シンポジウムに参加して

薬学研究科博士後期課程 2 年 三坂 眞元



口頭発表する三坂

本シンポジウムには、薬学および生活健康科学研究科博士課程の学生が、私を含めて6名参加しました。本学の学生は全員10分間の口頭発表を行いました。私にとって国際学会で、英語で発表をする初めての経験でしたので、前もって十分な発表練習を積んだのですが、現地に入ってから自分の英語がちゃんと伝わるだろうかという不安が高まり、発表前はとても緊張しました。しかし、いざ始まると気持ちも落ち着き、言いたいことが相手に伝わるようなプレゼンテーションを心がけました。また、オハイオ州立大学での語学研修の甲斐あって、続く質疑応答では、質問の聞き取りと返答を思った以上にスムーズに行うことができました。今回の発表は、私の今後の研究生活にとって大変貴重な経験になりました。ただ、2日間のシンポジウムとしては内容が盛り沢山であったため、すべての進行がやや駆け足という印象で、特にポスター発表での討論にもっと

時間が欲しかったと感じました。

シンポジウム後は、浙江省医学科学院の方に西湖、杭州市の庶民的な市場や天台山国清寺などを案内していただき、中国の歴史や文化の一端に触れることができました。私にとって初めての中国でしたが、車社会と建物の近代化は私の想像以上でした。至る所で高層ビルや道路の建設が行われており、中国が今まさに発展最中であることを改めて実感しました。さらに、中国の学生たちと学生生活や文化の違いなどについても英語で交流することができ、実りある研修でした。

最後になりましたが、このような機会を与えて頂きましたグローバルCOEプログラム関係者の方々に深く御礼申し上げます。



本学から参加した院生たち

中医の実践などを視察

薬学部 教授 赤井 周司



胡慶余堂で中医の実践を視察

シンポジウム終了後、浙江省医学科学院の案内により、韓国、タイ、マレーシアからの参加者とともに西湖や南宋時代の街並みを保存している河坊街の胡慶余堂を訪ね、今に生きる中医の実践を視察しました。手書きの処方箋を受け取るや、壁一面の天井まで届く膨大な数の引き出しから生薬を取り出し、昔ながらの天秤で秤量し、紙袋に詰めるまでをあっという間にこなし、また、時間をかけて患者への服薬指導を熱心に行っている様子が大変印象的でした。

学術交流はもちろんのこと、芸術、歴史、食を含めた様々な話題に花が咲き、アジア各国からの参加者相互の親睦が一層深まりました。



各国からの参加者とともに、西湖湖畔にて

男女共同参画推進センターの設立

男女共同参画推進センター長 中山慶子

本学に、学内の男女共同参画の推進を担う中核的機関として、平成20年7月28日「男女共同参画推進センター」が誕生しました。

男女一人ひとりが対等な立場で、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現は、21世紀日本社会の最重要課題とされており、大学においても、男女共同参画の推進がその責務として強く求められる時代となっています。本センターはその責務を果たすため、研究・調査や教育・啓発の充実、雇用や環境の整備などさまざまな面から、学内の男女共同参画の実現をめざして、すべての学生と教職員に対する全学的な取り組みを行っていくことを目的として設立されました。

こうした取り組みの一環として、早速平成21年1月14日には、本センターを担当窓口とする「あざれあデートDV防止出前講座」が、国際関係学部棟3219室にて開催されました。これは、静岡県男女共同参画センターあざれあが、毎年県内の大学・短大などを対象に講師を派遣し、デートDV防止のための学生向け出前講座を開催するもので、設立されたばかりの本学男女共同参画推進センターが県立大学側の窓口を担当し、あざれあと協力しながら実施しました。今回は、わが国でDVの防止、被害者救済、加害者更正のため中心的な活動をされている民間団体「アウェア」の代表山口のり子氏を講師に迎え、学生、教職員など約30人が参加しました。デートDVが深刻な人権侵害であり、「力と支配」「暴力容認」「ジェンダー・バイアス」を原因として引き起こされること、若者が加害者にも被害者にもならないために、性的な自己決定権を尊重し、DVを認める誤った価値観を払拭していくことが大切であることなど、多くの貴重な知識を、DVDやロールプレイなどを通してわかりやすく学ぶことができ、参加者にも大変好評でした。

本センターでは引き続き、学内の男女共同参画の推進をめざして、こうしたさまざまな活動を積極的に行っていく予定です。今後とも本センターへのご支援をよろしくお願いいたします。



講師の山口のり子氏（左）とロールプレイをする学生

現代韓国朝鮮研究センターが学術交流協定を締結

現代韓国朝鮮研究センター（所長：伊豆見元国際関係学部教授）は、1月30日、韓国・釜山に所在する東西大 学校日本研究センター（所長：張済国同大副総長）との間で学術交流協定書に調印しました。同日、釜山の東西大キャンパスで行われた調印式には、両所長が出席し、協定書にサインして友好協力を誓いあいました（写真）。

互恵の精神に基づき、双方は必要かつ実現可能な条件の下で、a) 研究者の交流、b) 共同研究計画の推進、c) 学術シンポジウムの開催、d) 学術刊行物、資料、情報の交換、e) 両大学の学生・大学院生の交流、を行うことで合意しました。

東西大は11学部・4研究科（大学院）を擁する私立の総合大学であり、ソウル所在の大学以外で日本研究センターを併設しているのはここだけです。日本との学術交流は活発で、同大と本学の一部教員や学生・院生との間ではすでに実質的な交流が10年以上前から行われており、今回の協定締結に至りました。今後の交流発展が期待されます。



調印式で張所長（左）と握手する伊豆見所長

新型インフルエンザから身を守るための公開講演会を開催

感染症管理対策委員長 薬学部 教授 小野 孝彦

11月29日に本学と、静岡市静岡医師会、静岡市清水医師会、静岡市薬剤師会、清水薬剤師会、静岡市保健所の主催、静岡県医師会、静岡県薬剤師会、静岡県看護協会の後援のもと「新型インフルエンザから身を守るための公開講演会」を開催し、一般、本学教職員、学生併せて約400名の多数の方のご参加をいただきました。

わが国で新型インフルエンザが流行した場合、約3,200万人に感染し、最大で約64万人が死亡するという試算もあります。講演Ⅰでは、まず本学薬学部の鈴木隆教授から「新型インフルエンザの正体は何か？」を解説いただき、次いで、講演Ⅱでは国立病院機構仙台医療センター 西村秀一ウイルスセンター長から「地域でたたかう新型インフルエンザ！地域で守るみんなの健康！」をわかりやすくお話いただきました。

この講演会は地域連携による新型インフルエンザ流行対策として、平成20年度の学長特別研究費に採択された課題により開催しました。今後の静岡県あるいは静岡市における対策に関連して、活発な質疑応答がありました。出席者に対して、講演の前後でアンケートを実施し、回収することができましたので、目下、講演の成果に関して解析を行っているところです。また開催メンバーからなる作業部会で、地域における対策案を策定中です。

従来型のインフルエンザに対する予防が新型にも応用できます。ワクチン接種のほか、すぐに出来ることとして、うがいと手洗い、そしてマスクの使用と咳エチケットがとりわけ大切です。



会場入口



講演会会場

国際室内環境シンポジウムを開催

12月20日に、浙江大学の朱利中教授他4名の浙江大学の方が来静され、The 2nd China-Japan International Symposium on Indoor Air Pollution and Controlを、ホテルアソシア静岡ターミナルで開催しました。本シンポジウムは、環境科学研究所・雨谷准教授がJST戦略的国際科学技術協力推進事業の一環として開催したもので、日本国内からは、柳沢幸雄・東京大学教授・前室内環境学会長をはじめ室内環境の研究者3名をお招きして室内環境汚染とその浄化技術に関する講演が行われました。浙江大学とは昨年大学間協定も結ばれたこともあり、シンポジウムの前には西垣学長（当時）、岩堀研究所長との会食の場も設けられ、さらには、シンポジウムでは大学院生の発表も複数あり、貴重な交流の場となりました。



シンポジウム参加者（前列右から2番目が朱教授）

グローバルCOE プログラム

「第1回国際健康長寿科学コンファレンス—薬食同源—」の開催



ワークショップ会場

本学の薬学研究科と生活健康科学研究科は、「薬食同源」を基本的学術理念に掲げ、連携して国内における食薬融合を基盤とした健康長寿科学の唯一の拠点として、健康長寿科学分野の体系化の実現と有為な人材育成を目指した教育研究活動（グローバルCOEプログラム）を行っています。教育活動および成果報告の一環として、さらにこれらの活動を国内外に発信するために、英語を発表および質疑応答の共通言語として、「第1回国際健康長寿科学コンファレンス—薬食同源—」を12月18日・19日に本学で開催しました。

教育・研究連携の構築を進める米国の4大学から、食薬融合研究の根幹を形成する研究分野の4教授を招聘し、1日目は、大学院生のためのワークショップを開催しました。Barbara Timmermann教授（Kansas大学）は、「健康長寿のための機能性食品」について、Takayuki Shibamoto教授（California大学）は、「食の安全性」について、Richard T. Sayre教授（Ohio州立大学）は、「作物の有効成分増強」について、Ronaldo Ferraris教授（New Jersey医科歯科大学）は、「果糖の生理機能」について講演されました。高度な内容を、巧みにかつ分かりやすく解説して下さいました。参加者は、教員50名、大学院生84名（博士後期課程41名、博士前期課程43名）、ポスドク・学部生・その他67名の計201名でした。

2日目は、西垣克学長（当時）の挨拶に引き続き、木苗直秀副学長（現学長）・COE拠点リーダーが、本学のグローバルCOEプログラムに関して概説しました。その後、同プログラムの4つの研究領域ごとに、米国から招聘した4名の研究者、国内から招聘した4名の研究者、本学のグローバルCOEプログラム事業推進担当者4名が講演を行いました。また、同プログラム事業推進担当者20名、研究協力者・特任准教授・ポスドク8名、計28名がポスター発表を行いました。

「機能性食品と食薬相互作用」の研究領域では、Timmermann教授が「ウコンの関節炎治療作用のトランスレーショナル研究」について、大泉康教授

副学長（現学長）・COE拠点リーダー・生活健康科学研究科教授 木苗直秀

薬学研究科教授 山田静雄

生活健康科学研究科長・教授 小林裕和

生活健康科学研究科教授 合田敏尚

グローバルCOEプログラム・事務局スタッフ

（静岡県立大学特任教授、横浜薬科大学教授、東北大学名誉教授）が「陳皮成分、ノビレチンのアルツハイマー病モデル動物における学習機能障害改善作用」について、山田静雄教授（薬学研究科）が



ポスターセッション

「前立腺肥大患者における薬物植物療法」について講演しました。「栄養機能の応用」の研究領域では、Ferraris教授が「果糖輸送体の発現調節」について、合田敏尚教授（生活健康科学研究科）が「インスリン抵抗性と食後高血糖の高感度指標」について、渡辺光博准教授（慶応義塾大学）が「胆汁酸シグナル伝達機構とその応用」について講演を行いました。「植物成分強化」の研究領域では、Sayre教授が「高吸収性鉄強化植物の開発戦略」について、小林裕和教授（生活健康科学研究科）が「植物におけるポリフェノール成分の増強」について、三沢典彦教授（石川県立大学）が「植物におけるカロテノイド成分の増強」について講演を行いました。「食の安全」の研究領域では、Shibamoto教授が「食品加工過程で産生する有害成分」について、若林敬二所長（国立がんセンター）が「高脂血症による腫瘍形成の促進とがんの化学予防」について、木苗直秀教授（生活健康科学研究科）が「メイラード反応生成物の遺伝毒性と糖尿病との関連」について講演を行いました。参加者は、教員64名、大学院生78名（博士後期課程40名、博士前期課程38名）、ポスドク・研究員・学部生・学外聴講者・その他54名の計196名でした。本コンファレンスの開催を通して、本学における健康長寿科学の教育研究活動を国内外に発信することができたと考えております。今後もこのようなコンファレンスや研究会を継続して開催することにより、食薬融合分野における研究者や企業の連携の輪が広がることを期待しています。

また、1日目のワークショップ終了後、市内のホテルで交流会を開催し、国内外の招聘研究者とグローバルCOEプログラム事業推進担当者、研究協力者、ポスドク計25名が出席して、親交を深めるとともに情報交換をしました。

静岡健康・長寿プレフォーラム2008 —薬食融合研究の潮流をつくる—



Johan Auwerx博士

11月7日(金)から3日間に亘り開催された第13回静岡健康・長寿学術フォーラムに先立ち、前日の6

日(木)午後から外国人研究者2名を招聘し、静岡健康・長寿プレフォーラム2008を本学小講堂で開催しました。

Johan Auwerx博士(仏国ルイ・パスツール大学遺伝・分子細胞生物学研究所教授)は、「転写補因子ネットワークを介した代謝性疾患の制御」について、鄭瑞棠博士(台湾国立成功大学医学研究院薬理学研究所教授)は、「薬草の機能性とその食品への応用」について講演されました。それぞれ最先端の研究内容で、大学院生・若手研究者には大いに刺激になったと感じられました。

また、本学の博士後期課程大学院生2名が、英語で研究発表を行いました。

鈴木拓史君(生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻)は、「小腸吸収細胞の分化に伴う遺伝子群の発現制御」について、廣岡康男君(薬学研究科・製薬



鄭瑞棠博士

生活健康科学研究科 教授 合田 敏尚

グローバルCOEプログラム・事務局スタッフ

学専攻)は、「プローブ分子を指向したカテキン類の合成研究」について発表しました。本学のグローバルCOEプログラム「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」では、大学院生・若手研究者のグローバルコミュニケーション能力向上を図るため、機会を設けて英語による研究発表を行っておりますので、発表者はもとより、出席した大学院生・若手研究者には十分に有意義なものであったと確信しています。参加者は、教員28名、大学院生71名(博士後期課程19名、博士前期課程52名)、

ポスドク・研究員・学部生23名の計122名でした。

終了後、市内のホテルで交流会を開催しました。招聘研究者2名、COE拠点リーダーの木苗直秀副学長(現学長)・教授をはじめ教員14名が出席し、懇談のなかで情報交換も行われ、有意義なひとときでした。



セミナー会場

第13回静岡健康・長寿学術フォーラム 元気な血管で健康な長寿を一老いは血管に始まる



菅谷純子教授

11月7日(金)から9日(日)まで3日間に亘り、第13回静岡健康・長寿学術フォーラム



大島寛史教授

が、静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」で開催されました。主催は、静岡県 静岡健康・長寿学術フォーラム組織委員会で、佐古伊康先生(しずおか健康長寿財団理事長)が会長を務められました。本学は、グローバルCOEプログラム事業推進のメンバーが中心となって企画協力(共催)をしました。

1日目は、静岡健康・長寿学術フォーラム組織委員会の廣部雅昭委員長(元学長)の挨拶に続き、「薬食融合研究から見たメタボリックシンドローム対策と治療」に関して、本学の奥直人教授(薬学部長)と合田敏尚教授(食品栄養科学部)が座長を務め、6名の研究者が講演を行いました。本学からは、菅谷純子教授(薬学部)が「メタボリックシンドロームと薬物代謝：酸素合成イヌリン摂取による脂肪肝形成時に認められる肝機能障害抑制効果」について、大島寛史教授(食品栄養科学部)が「メタボリックシ

薬学部長・教授 奥 直人

食品栄養科学部 教授 合田 敏尚

グローバルCOEプログラム・事務局スタッフ

ンドロームのバイオマーカーとしてのコレステロール炎症性酸化物」について講演を行いました。

2日目は、石川嘉延静岡県知事、廣部雅昭委員長の挨拶に続き、船橋徹博士(大阪大学大学院医学系研究科内分泌代謝内科学准教授)が「メタボリックシンドローム、内臓脂肪と全身動脈硬化症」について基調講演をされました。また、「動脈硬化症の危険因子」、「メタボリックシンドロームに伴う臓器障害」、「メタボリックシンドロームに伴う臓器障害の治療」の3つのセッションで、合わせて10名の研究者が講演を行いました。

3日目は、「(県民フォーラム)「メタボ」が投げかけたもの—血管の老化とその予防・克服」に関して5名の研究者が講演を行いました。本学からは、内藤初枝講師(短期大学部)が「「ビンゴ式食事管理システム」を活用した食事管理」について講演を行いました。

3日間の出席者数は、研究者、行政関係、一般、本学の大学院生、学部生等合わせて、延べ1,861名でした。



内藤初枝講師

グローバルCOE科学英語プログラム Global COE Scientific English Program

グローバルCOEプログラム・特任准教授 フィリップ・ホーク

グローバルCOE科学英語プログラムは、3年目が始まろうとしています。薬学研究科/生活健康科学研究科大学院学生に対し、科学的分野での英語コミュニケーション能力の向上を支援するために、本プログラムを平成19年に開始しました。平成19年10月から、「オーラル・コミュニケーション」と「アカデミック・ライティング」の授業を試行し、平成20年度には、「アカデミック・プレゼンテーション」を授業科目に追加しました。平成21年度には、さらに2つの新規授業科目を追加します。iPodを使用したリスニングである「インディペンデント・リスニング」と科学的事項に関する学生主導のディスカッションである「学生主導型ディスカッション/Student-Led Scientific Discussion」です。

オーラル・コミュニケーション



「オーラル・コミュニケーション」は、1年間の実践的なコミュニケーション授業で、「オーラル・コミュニケーションⅠ」と「オーラル・コミュニケーションⅡ」から構成され、研究者が海外の学会や訪問先において討論する際に直面する様々な状況に対応する内容を扱います。ペアや小グループになって、討論、ディベート、および状況を設定した会話を実施します。発音練習を含むスピーキングに重点を置きますが、リスニングの練習もします。同程度の能力の学生と練習ができるように、基礎と中・上級クラスの2つに分かれています。平成20年度は、26名の学生が参加し、授業終了時まで、受講生の英会話能力は向上し、また受講生は自信をつけました。本授業に対し、それぞれ71%の受講生から、「受講する価値がとてもあった」あるいは「とても興味を持てた」という評価を得ました。

小貫 仁君（薬学研究科・博士前期課程2年）



オーラル・コミュニケーションの授業では、基本的な自己紹介、日常会話の他に専門用語を使った会話までの幅広い状況を想定した英会話を学びました。授業中の会話はすべて英語で行われるので、緊張感を持って取り組むことができ、スピーキングはもちろんリスニングの力も身に付きました。また、この授業を通して他の研究室の学生たちと

情報交換できたことは大きなメリットでした。英会話のスキルだけでなく、コミュニケーションそのものの重要性を教えてもらった貴重な時間でした。

アカデミック・ライティング



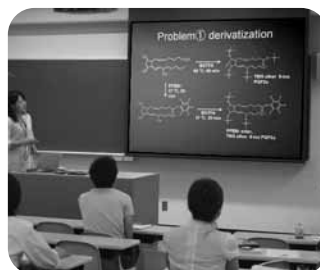
「アカデミック・ライティング」は、科学論文、発表ポスター、履歴書、およびEメールの作成と編集を扱います。毎回、各種ライティングの主な問題点について説明し、各自にライティングしていただきます。学生は4から7点の短い作文を提出します。私は、これらに対して詳細な添削とフィードバックを行います。平成20年度は、13名の学生が参加し、受講生は、より明快で論理的な論文が書けるようになりました。本授業に対し、67%の受講生から、「受講する価値がとてもあった」、また87%の受講生から、「とても興味を持てた」という評価を得ました。

大住美穂さん（生活健康科学研究科・博士後期課程2年）



アカデミック・ライティングの授業では、英語での論文やポスターの作成の書き方を学びました。細かい文法や、前置詞等の使い方など、見落としがちなポイントを重点的に教えて頂けるので、実際に自分で英文を書くときの参考になるとと思います。

アカデミック・プレゼンテーション



「アカデミック・プレゼンテーション」は、平成20年度から開始しました。目的は、会議や研究室セミナーにおいて、効果的な口頭発表をするために必要な知識と能力を向上させることです。授業では、文章構成、スライド編集、言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション、および質疑応答の5項目を扱います。学生は、学期初めにプレゼンテーションを行い、その様子をビデオで撮影します。学生は、ビデオを見て、自分のプレゼンテーションを評価します。ワークショップ形式で、各自のプレゼンター

ションに対して上記各項目に関して見直します。一連の授業の最終時に、学生は改訂版のプレゼンテーションを行います。平成20年度には、16名の学生が参加し、各項目において30%以上の能力の向上が見られ、言語コミュニケーションと質疑応答については、最高で約40%の上達が認められました。83%の受講生から、「受講する価値がとてもあった」、また75%の受講生からは「とても興味が持てた」との評価を得ました。

吉澤美沙さん（薬学研究科・博士後期課程1年）



私は**アカデミック・プレゼンテーション**を受講しました。分かり易く伝えることはもちろん、聴衆を引き込み、かつ興味・面白味を感じてもらえるような発表が大切だということを学びました。大変勉強になりました。今後のプレゼンにとても役立ちますので、ぜひ本授業の受講をお勧めします。

iPodリスニング・プロジェクト



このプロジェクトは、平成20年の夏、試験的に実施し、23名の学生が参加しました。インターネット上で利用できる科学的内容のポッドキャスト（リスニング教材）を活用しました。学生にはiPod（携帯型リスニング機器）を貸与し、リスニング練習のため、私が選択したオーディオファイルをダウンロードしていただきました。各ポッドキャストについてのオリジナル課題も準備しました。8週間後の終了時には、学生のリスニング能力は約10%向上し、最高では45%でした。本プロ

ジェクト参加者の46%が、「受講する価値がとてもあった」と評価し、また58%が、「とても興味が持てた」との評価を残しました。この試験的プロジェクトは、平成21年度のカリキュラムに追加する新規「インディペンデント・リスニング」の基盤となっています。

植草義徳君（生活健康科学研究科・博士後期課程2年）



iPodリスニング・プロジェクト

トは、英語系ポッドキャストの全番組をリスニング教材として利用するため、ニュースや教養番組といった様々なジャンルの英語に接することができました。空いた少しの時間を使って学習できる点も良かったです。

さらに毎週与えられる課題には内容を理解するための手がかりとなるプリントが添付されるため、問題に解答しながら楽しく学べました。

インディペンデント・リスニング、学生主導型ディスカッション（平成21年度新規授業科目）

平成21年度には、さらに2つの新規授業科目を導入します。1つは試験的iPodリスニング・プロジェクトを基盤とした「インディペンデント・リスニング」、もう1つは「学生主導型ディスカッション／Student-Led Scientific Discussion」です。後者は最近話題となっている科学的事項や問題に重点を置きます。私がサポートしながら、学生は議論する話題を選択し、学生が主導的に討論を行います。また、単位認定対象ではない「論文作成チュートリアル」も開始し、学生が執筆する英語論文について、相談に乗ります。これらの新規試みにより、3年目の科学英語プログラムは、過去2年間の成果をさらに発展させることになります。

薬学研究科／生活健康科学研究科教員向けプレゼンテーション・セミナー



平成20年度後期に、薬学研究科／生活健康科学研究科の教員向けに、プレゼンテーション・セミナーを毎月開講しました。セミナーは、教員と相談の上、大学院学生のために用意した「アカデミック・プレゼンテーション」で扱った課題を基に行いました。参加者のプレゼンテーション能力向上の支援に加えて、科学英語教育に対する教員の意識改革にも繋がりました。

井川貴詞助教（薬学研究科）

教員向けセミナーは、教員同士のディスカッション（もちろん英語で）を中心とした授業形式で進められました。その中で、ホーク先生がネイティブの立場から「日本人科学者のプレゼンテーションには何が足りないのか？」あるいは「どうすれば上達できるのか？」を要領よく教えて下さいました。英語を「話す」機会を頂けるので、私は喜んでこのセミナーに参加させて頂きました。このセミナーは悪戦苦闘しながら英語を話していた留学時代を思い出させてくれます。是非、このようなセミナーを増やして頂きたいと願っています。



邦訳：松葉美之（グローバルCOEプログラム・事務局スタッフ）
小林裕和（大学院生活健康科学研究科・教授／研究科長）

「世界各地の食事情に学ぶフード・セキュリティの未来」を開催

グローバル・スタディーズ研究センター研究員 国際関係学部准教授 湖中 真哉

12月6日に、本学国際関係学研究科附属グローバル・スタディーズ研究センターと大阪大学グローバルコラボレーション・センターの共催による一般公開シンポジウム「世界各地の食事情に学ぶフード・セキュリティの未来」が、87名の参加者を集め、本学小講堂にて開催されました。

本学グローバル・スタディーズ研究センターは、昨年8月に発足したばかりのグローバルイノベーション研究のためのセンターです (<http://ceglos.u-shizuoka-ken.ac.jp/>)。このセンターでは、国内外の様々な団体と連携して活動しており、今回のシンポジウムでは、両センターが協力して「フード・セキュリティ（食糧の確保・食糧安全保障）」の問題に取り組みました。

フード・セキュリティの議論では、国家レベルでの食糧安全保障に注目が集まり、世界各地の民衆が創り上げてきたフード・セキュリティに関する議論

は、忘れられてしまいがちです。そこで、このシンポジウムでは、「人間の安全保障」の考え方にしたがって、食糧についても、国家のセキュリティから人々のセキュリティに視点を移すことを試みました。

当日は、大阪大学・国立民族学博物館から総勢6名の研究者が来静し、開発学、人類学、国際法学、地域研究などの様々な分野の研究者が学際的に協力しました。西垣克学長（当時）のごあいさつの後、ベトナム、ロシア、インドネシア、ケニア、フランス、アメリカ（アラスカ）、カナダ、ブータンなどの世界各地で暮らすごく普通の人々の食事情が最新の現地調査の成果に基づいて紹介されました。最後のパネルディスカッションでは、世界各地の事例と各学問領域が意義深い対話を行い、それに触発されて、本学学生、一般参加者からも質問が尽きませんでした。



パネリストの方々

（撮影：望月良憲）



当日の会場

（撮影：望月良憲）

スルガ銀行ビジネスセミナー「静岡でビジネス改革を考える」を終えて

経営情報学研究科附属地域経営研究センター スタッフ 大吉 真里

地域経営研究センター開設以来ご支援をいただくスルガ銀行の寄附セミナーとして、西田在賢同センター長（経営情報学研究科教授）の企画により、金子恭則先生（スタンフォード大学理事）のご都合と横山禎徳先生（元マッキンゼー・アンド・カンパニー社東京支社長）のスケジュールが唯一重なりました、11月9日（土）に開催日を決定したのは、8月下旬でした。そのほどなく後に、リーマン・ブラザーズが経営破たんし、世界を巻き込んだ金融危機を迎えました。不安が煽られていく中、国際金融の専門

家でもある横山先生を静岡にお招きするこの機会に、「金融危機」についてのコメントをいただこうと、センター長が交渉にあたりました。ちょうど、東京大学小宮山総長が、韓国ソウルにおいて同様のテーマを掲げたご講演をされる際、横山先生が顧問としてアドバイスをされたばかりであったことから、快くお引き受けいただいたのは大変幸運なことでした。ご期待大きく、定員を上回る300名余りのお申し込みをいただき、追加の椅子を並べるほどのご来場者で賑わいました。

かつて、アメリカで最も成功したバイオベンチャー企業と評価されるジェネンテック社において、数百億円もの資金調達を果たす活躍をされた金子先生からは、ご自身の貴重な体験談をもとに、現在や過去の実績にとらわれず、自分自身と世情を見つめることで将来を読む「先見性の哲学」をご披露いただきました。

続いて、マッキンゼー社において定年退職を成し遂げた唯一の日本人として、今も世界中から敬われ、国内トップクラスの企業や著名大学から経営相談を受けられる横山先生は、世の中のさまざまな社会問題を取り上げては新しい見方で説く洗練された理論を展開し、会場を感嘆させました。問題を時系列に整理し、何が本質的な問題かを見極めることや、「システムはデザインしてこそ活かされる」とした、東京大学やハーバード大学で建築学を修めた専門家ならではの目識見は、受講された皆様の心を動かし

たようで、今も再度の講演を求めるお声をいただいています。

小雨交じりの悪天候の中、ご来場いただきました皆様と、このような貴重なご講演を実現するにあたって、永くご支援をいただいておりますスルガ銀行様に、改めて心からの御礼を申し上げる次第です。



講演する横山先生

フランスだよりーリール政治学院交換留学中間報告ー

国際関係学部 国際言語文化学科 3年 澤島 未来

9月にリールに来てからもう一学期が終わってしまいましたが、ここ4ヶ月ものすごい速さで時間が過ぎていきました。僕は目下非常に満足しています。色々ありますが、ここでは友達について書きたいと思います。

友達を作るのに必要なことはもちろん語学力（最初はかなり苦労した）、そしてもうひとつありきたりですが勇気でした。当初、ヨーロッパ人はペラペラしゃべるし、なんだか日本人より「偉い」気がして、自分が勝手に壁を感じていました。しかしある時今しかないと思い、持てる勇気をふりしぼって話しかけたら、こころよく自分を受け入れてくれました。そこからもう早かったです。友達が友達を呼んで輪がどんどん広がっていきました。なかには「週末だというのにどうしてミライは家で勉強するんだ！みんなと遊びに出かけなきゃつまらないだろう、いろんな人と話をしたほうが良い」とか言っている人もいました。二ヶ月経つくらいには大分生活も楽になり、彼らとよくパーティ、バー、ディスコ、美術館、映画、日曜の朝市などに行きました。自分が感じていた壁はいつの間にかなくなっていました。むしろ友達の多くは僕に「君は日本人でヨーロッパ人とは異なっている、だからおもしろい」といってくれます。彼らは本当に自分を

支えてくれ、楽しませてくれます。彼らとずっと話したいと思うと語学の勉強もはかどりとても良い循環です。

このリール政治学院にはEUや北米など本当に色々な国から留学生が来ています。このような国際的な環境に身をおけることは非常に自分にとって有意義です。今冬休みで彼らは皆故郷に帰ってしまったので二学期にまた会うのが待ちどろしいです！！二学期はより充実できるようまた頑張ります。

このような機会を与えてくださった静岡県立大学の先生や事務の方々には本当に感謝しています。



リールの寿司屋で。右から2番目が筆者

日本EU学会研究大会の開催

国際関係学部 教授 小久保 康之



岡村堯元日本EU学会理事長による基調講演

11月22日(土)、23日(日)の両日、本学にて日本EU学会第29回(2008年度)研究大会が開催されました。日本EU学会は、ヨーロッパにおける地域国際機構として目覚ましい発展を遂げているEU(European Union、欧州連合)について、政治、経済、法律、社会、歴史等様々な研究領域を専門とするEU研究者から組織される学際的な学会であり、大学所属の研究者だけでなく、官庁関係者、民間シンクタンクの研究員、ジャーナリスト、弁護士など多様な会員から構成される文字通り開かれた学会です。1980年に設立されて以来、EU統合の進展と共にその活動も活発化し、今では会員数も500名を超えています。英語名は、The European Union Studies Association-Japan, EUSA-Japanで、世界EU学会、アジア・太平洋EU学会の傘下にも入っている国際的な学会です。

毎年11月に、学会理事の所属大学において年次研究大会が開催されており、本年度は、同学会の理事(年報編集委員長)を務める小久保を大会責任者として、本学において研究大会が開催され、総勢約200名の会員が参加しました。

本年度は、「EUの環境ガバナンスとグローバル社会」を共通テーマとし、環境問題で世界をリードするEUについて多角的な視点から多くの研究報告がなされました。基調講演を行った岡村堯氏(NPO地球環境・経済研究機構理事長、元EU学会理事長)は、EUが環境問題で一步先んじているのは、すべての問題に法的土台を構築し、EU環境法に基づき、利害対立をEUの裁判所の判断に委ねる方法を採用したことにあると強調しました。また、招待講演者であるベルギー・ルーバン大学のデルマルティ

ノ教授は、EUの環境ガバナンスは、世界、広域地域、国家、下部地域、地方という縦のレベルでアクターの多元化が見られ、同時に環境問題が社会問題などとリンケージすることにより横のレベルでも広がりを見せており、環境問題のマルチレベル・ガバナンスを理論的に再検討することの重要性を指摘しました。その他、多くの会員から有意義な報告がな



広域ヨーロッパ研究センター主催特別シンポジウム
ライター・インスブルック客員教授の特別報告

され、活発な意見交換が行われました。

また、本学大学院国際関係学研究科に附置された「広域ヨーロッ

パ研究センター」主催の特別シンポジウム(英語)も併せて開催され、ライター・インスブルック大学客員教授、六鹿茂夫本学教授、小久保の3名が、広域ヨーロッパにおける国際政治の動向について研究報告を行いました。

11月22日の夜、ホテルセンチュリー静岡で盛大な懇親会が開催され、本学の鈴木雅近理事長と西垣克学長(当時)にも祝辞を頂き、わずかな時間ではありましたが、有意義な交流の場を持つことができました。本学関係者はもちろんのこと、静岡観光コンベンションサービス協会、静岡茶おもてなしコンベンションなど、お世話になった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

尚、デルマルティノ教授には、研究大会前日の11月21日(金)に、本学の学生向けの特別講演会にも協力して頂き、現在批准過程にあるEUのリボン条約による今後の動向についてお話を伺うことができました。約150名の学生諸君が英語による講演に熱心に耳を傾けていました。



研究大会の運営を支えた小久保ゼミの諸君



『静岡新聞』
平成21年11月23日掲載記事

日本医療・病院管理学会学術総会を開催

昨年11月15日(土)～16日(日)に本学会を会場に第46回日本医療・病院管理学会学術総会（主催 日本医療・病院管理学会：学術総会長 小山秀夫（経営情報学部長））を開催いたしました。まずはご協力・ご支援いただいた静岡県立大学教職員の皆様に御礼申し上げます。

小雨がぱらつく天候でしたが、各地より約700名のご参加をいただきました。本学術総会では、メインテーマを「病院管理とNPM（ニュー・パブリック・マネジメント）」と題しました。ニュー・パブリック・マネジメントとは、民間企業の経営手法をできる限り公共部門にも取り入れようとする考え方で、指定管理者制度やPFI（Private Finance Initiative）などにより具体化されています。また新・公共マネジメント技法であるNPMとともに、公立病院制度改革にも焦点に据え、今後のわが国の医療・病院管理の将来を議論することを目的といたしました。

1日目は、教育講演「ニュー・パブリック・マネジメントのWillとSkill」において、関東学院大学教授の大住荘四郎先生が、日本においてNPMはきちんと実践されているか、ポストNPMはあるのか、という視点で問題提起をされました。特別講演Ⅰ「生命輝かそう日本の公立病院－ピンチをチャンスに－」では赤穂市民病院院長・全国自治体病院協議会会長の邊見公雄先生が、自治体病院の現状や課題、

ピンチをチャンスに変えようとする病院現場の取り組みを巧妙洒脱に、しかし迫力を持ってお話くださいました。その後、学術シンポジウムⅠ「病院管理とNPM」では、医師不足、自治体病院の統合、病院PFIなど病院・医療制度を取り巻く様々な論点が提起されました。

そして2日目は、西垣学長（当時）に「静岡県の医療政策と病院管理」について講演いただき、その後、公開シンポジウム「選ばれる自治体病院－病院のマグネティズムを考える－」及び学術シンポジウムⅡ「近年の医療制度改革と病院経営持続性」では、医療制度改革の中、どうしたらマグネティズム（磁石のように人をひきつける）の特性（魅力）を持った病院を作り、病院経営を持続できるのか、人材育成・確保、組織運営、経営などの多面的な視点から討論がなされました。最後に、船橋市立リハビリテーション病院の指定管理者代表の石川誠先生に特別講演Ⅱ「指定管理者としての回復期リハビリテーション病院の経営」をご講演いただきました。石川先生のリハビリテーション医療サービスにける意気込みと取り組み、サービスを基盤にした壮絶な経営努力を伺い、静的な病院経営ではなく動的な病院経営が必要とされる時代を感じました。

会期中、準備不足もあったとは存じますが、ともあれ大きな事故もなく終えられたことに感謝しております。



新公共経営について講演する大住教授



医療制度改革について討論するシンポジストの方々

短期大学部

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)英国実習報告会

短期大学部社会福祉学科 准教授 江原 勝幸

HPS（ホスピタル・プレイ・スペシャリスト）とは、「Play（遊び）」を通じて、病気や怪我で療養中の子どもたちやその家族を支援する専門職です。短期大学部では「HPS養成教育プロジェクト」が平成19年度に文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」に採択され、国内初となるHPSの養成に取り組んでいます。

HPS英国実習はこのプロジェクトの一環として、養成講座実習指導者を対象に、継続的な専門知識の習得及び技術のレベルアップを図り、わが国におけるHPSリーダーとしてその実践力や応用力を高めることを目的に実施されました。

実習は平成20年11月15日から23日の日程で実施され、実習生の他に静岡県立総合病院小児科の原崎総括医長も同行し、小児科医の立場から病院における「Play」の重要性について現地視察を行いました。

平成21年1月24日(土)に短期大学部講堂で実施された報告会は、英国でHPSが専門職として病院で活躍する様子や用いる技法などの実習成果を報告し、ディスカッションを通じて今後の我が国の小児医療における「Play」のあり方や方向性について明確化する目的で開催されました。

報告会には第2期の養成講座修了生、病院関係者、県立大学看護学部学生など多数参加し、発表者7名の以下のような報告に熱心に耳を傾け、活発な意見交換が行われました。

◇英国におけるHPS実習の概要と成果

◇Great Ormond Street Hospital

◇Royal Hospital for Sick Children

◇Kingston Hospital

ー江原勝幸（短期大学部社会福祉学科）

ー小島広江（聖隷浜松病院）

ー諏訪部和子（静岡県立こども病院）

ー田中久美子（あいち小児保健医療総合センター）

ー中山陽子（静岡県立こども病院）

ー小長谷秀子（静岡県立総合病院）

ー原崎正士（静岡県立病院小児科 総括医長）

英国の病院では、ハード面だけでなく子ども主体の医療ケアが実践され、そのためにHPSが専門職として活躍し、医療チームの一員として不可欠であることが報告されました。



Kingston Hospitalのプレイルームで、実習生が乳児のベッドサイドで行うプリパレーション遊具を準備

実習生は「Playこそは子どもの成長発達に欠かせない」という理念のもとに診療や治療がおこなわれている様子を体感し、病院という場を特別な場所や領域という捉え方ではなく、Playが病院で展開されることが自然であるということ、そしてHPSが子どもの意欲を引き出すというアプローチは当然ですが、基本的に遊びたいことや気分を尊重し、何かを実践させることを目的にするような力の入った関わりでなく、ごく自然に、病院内であっても、子どもが自由に遊んでいた様子を伝えていました。

実習において英国のHPSたちは、プレパレーション（*1）やディストラクション（*2）などの技術ばかりに着目するのではなく、まずは子どもと普通に遊ぶことが大切であるということを指摘し、40年ほど前のイギリスも現在の日本同様に医療現場でPlayが認識されておらず、HPSの活動を一つ一つの積み重ねた結果により医療スタッフや病院経営者などに理解が深まっていったプロセスの重要性を述べていました。

この英国実習を機に、参加した実習生の視野がより広がり、各自の

職場での役割や課題などが明確になったことが大きな成果であり、今回の報告会でのディスカッションを含め、各自の学びを共有化し、よりHPSの専門性を高め、医療関係者を含めた志をともにする者が連携・協働する必要性が再確認されました。

* 1 プレパレーション・・・入院・検査・処置などの不安や恐怖心に対し、病気や手順などを分かりやすく説明し、病児や親の対処能力を引き出す方法

* 2 ディストラクション・・・気がまぎれるような遊びや遊具などを用いて、検査や処置の苦痛や緊張を緩和する方法



Royal Hospital for Sick Childrenの手術室プレイルームに配属されている2名のHPSと

第5回「看護と社会」研究全国集会開催される

第5回「看護と社会」研究全国集会実行委員会 委員 看護学部教授 三輪真知子

第5回「看護と社会」研究全国集会は、12月6日(土)に静岡県立大学短期大学部で開催されました。

「看護と社会」研究全国集会は、変動する社会の中で生活する個人・家族に最も適したサービスを提供するには、分化と統合のバランスを保つことが重要であると考え、看護と社会という開かれた視点で、看護以外の様々な職種の方や、市民との交流・ディスカッションの場となることを目指しています。

本研究集会には、看護職をはじめとする専門職120名、市民30名、学生70名の参加者があり、各分科会や基調講演を通して、熱心なディスカッションがなされました。



第二分科会会場の様子

プログラム

第一分科会 テーマ：「現代社会における子産み・子育てと看護」

座長：浜松医科大学医学部看護学科准教授
県西部浜松医療センター副看護部長

久保田君枝氏
南谷佐知子氏
草野 恵子氏
蜂谷 明子氏

第1報告 「地域における助産師の役割」

くさの助産所長

第2報告 「小児科医の立場から」

蜂谷医院小児科

第3報告 「少子社会における妊娠・出産にかかわる政策提言に関する研究」

国立保健医療科学院公衆衛生学部ケアシステム開発室長

福島富士子氏

第4報告 「子育て支援の現状と課題—つどいの広場“きしゃぼっぱ”を通して—

しまだ次世代育成支援ネットワーク代表

染谷 絹代氏

第二分科会 テーマ：「医療の場における患者の権利保障と看護」

座長：静岡県立大学看護学部教授

松田 正巳氏

名古屋大学大学院医学系研究科博士後期課程

鈴木 千智氏

第1報告 「病院の評価—患者の権利・・・患者の権利を保障する看護への取り組み」

静岡赤十字病院副院長

望月 律子氏

第2報告 「看護教育では権利保障をどう教えているか—小児看護学を事例として—

帝京大学医療技術部看護学科教授

星 直子氏

第3報告 「知りたい・知ってほしいが原動力—当事者の立場から—

主婦

伊藤美智代氏

第4報告 「患者の権利保障—弁護士からの立場から—

赤松岳法律事務所

赤松 岳氏

基調講演 「患者のQOLを重視した看護実践—生活者としての権利回復の視点から—

筑波大学名誉教授

現静岡県立大学看護学部教授

紙屋克子先生

産学民官連携

「“産・学・民・官”の連携を考える集い」を開催

産学官連携推進本部 本部長 木苗 直秀



会場の様子

1月22日(木)に「静岡県立大学“産・学・民・官”の連携を考える集い」が開催されました。

この行事は、「産・学・民・官の連携促進」

をテーマに学外の企業、団体、行政を県立大学にお招きし、本学の教職員と交流を図ることで、本学の研究教育の成果（シーズ）を社会のニーズとマッチングし、産学民官連携事業を進める「場を作る」ための行事です。

内容は、①研究室公開・研究情報公開コーナー、②産学連携セミナー、③地域結集型研究開発プログラム発表会 キックオフセミナー、④交流会の4部構成で開催されました。

第1部の研究室公開は、14時から15時まで各学部で行なわれました。

各研究室では研究内容のポスターを掲示し、教員が学外の企業や研究機関、行政関係者等に熱心に説明し、意見交換する姿が見られました。また、小講堂では14時から16時30分まで「研究情報公開コーナー」



鈴木理事長による挨拶

が設けられました。学内の27名の研究者が研究内容をパネルやポスター、試作品や試食品を展示してアピールしました。また、学外からも静岡県新産業集積クラスター、海洋深層水（焼津市）から出展され、多くの方々が展示内容の説明に熱心に耳を傾ける光景が見ら

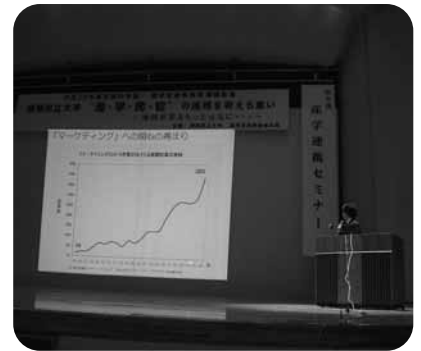


座長・木苗副学長（現学長）

れました。

第2部は、15時から大講堂で開催され、鈴木雅近理事長、木苗直秀副学長（現学長）の挨拶に続いて、来賓を代表して、静岡県副知事川口正俊様よりご挨拶をいただきました。その後、「地域産業を元気にする“産・学・民・官”連携」をテーマとしたセミナーが開催されました。

まず最初に、静岡農政事務所の高橋伸悦所長より「食・農・官・学の連携による地域再生」をテーマに講演いただき、2番



岩崎邦彦教授（経営情報学部）の講演

目に帯広畜産大学の伊藤繁副学長より「食の安全に貢献する産学連携」をテーマに講演いただき、3番目に本学経営情報学部の岩崎邦彦教授より「地域産業発展のためのマーケティング」をテーマに講演をいただきました。

第3部は、大講堂で16時30分から開催されました。これは、昨年10月に独立行政法人科学技術振興機構の事業として採択されたもので、「静岡発 世界を結ぶ新世代茶飲料と素材の開発」を目指して、この1月より5年間の事業がスタートしました。研究代表者として、食品栄養科学部長中山勉教授より「本プログラムの研究の基盤となる技術について」をテ



研究情報公開～新製品紹介・試食コーナー～

マに講演していただきました。その他、研究開発のテーマリーダー・サブテーマリーダーとして、薬学部奥直人学部長、菅敏幸教授、山田静雄教授、食品栄養科学部横越英彦教授の紹介がありました。

第4部は、18時から学生ホールにて、企業、研究機関、行政関係者と本学教職員など、およそ160名が参加して、交流会が開催されました。本学マンドリン部による素晴らしい演奏も行なわれ、和やかな雰囲気の中で、飲み物を片手に会場のあちこちで、名刺交換を含め、交流が行なわれました。

今回の行事について、学内外の方々に御参加・御協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。



交流会の様子

「環境の世紀を支える最新技術」をテーマに 企業技術交流会を開催

環境科学研究所 教授 坂田 昌弘

12月10日(木)に静岡県立大学小講堂を会場にして、静岡化学工学懇話会の主催による第17回企業技術交流会が開催されました。今回は本学環境科学研究所が共催し、企画を担当しました。テーマは、静岡県の中中部地区を中心に本社や工場・研究所を有する企業の方々から、環境に関わる最新技術を紹介していただくとの趣旨から、「環境の世紀を支える最新技術」としました。本交流会には合計87名の参加があり、そのうち本学および県内の大学から33名の学生が参加しました。

本交流会では、最初に企業6社の講演があり、それに引き続いて大講堂ホワイエにおいてポスター掲示と製品展示が行われました。各企業の講演題目は以下のとおりです。

- ①サッポロビール(株)：サッポロビールのLCAに関する取り組み
- ②いであ(株)：DNA解析を応用した最新の環境調査技術
- ③(株)キャタラー：排ガス浄化触媒と環境
- ④(株)巴川製紙所：粘土を主成分とする柔軟性耐熱フィルムの開発
- ⑤日本軽金属(株)：地球環境にやさしい素材 アルミニウム
- ⑥ポリプラスチックス(株)：環境を考慮したエンジニアリングプラスチック材料

そして最後に、「水道水の安全確保に関する最新の動向」と題して、本学環境科学研究所教授の国包章一先生による特別講演が行われました。

講演は、環境調査や環境保全に関する新規技術を中心に盛り沢山の内容でしたが、世界最先端の技術や有数な世界シェアを誇る製品が、この静岡県から産み出されていることが次々に紹介されました。いずれもすごいなと感心することばかりで、学生に対しても強くアピールする講演でした。



講演会の様子



ポスター掲示と製品展示の様子

第6回しずおか環境・森林フェアへの出展

環境科学研究所 助教 藁科 カ

昨年11月14日(金)～16日(日)の3日間、ツインメッセ静岡にて「第6回しずおか環境・森林フェア」が開催されました。静岡県立大学環境科学研究所は、第1回よりこのイベントに参加し、来場者の方々に本研究所の環境への取り組みを広く知って頂くよう努めてきました。今回も本研究所13研究室のこれまでの環境研究成果と現在の研究内容をパネル展示にて紹介しました。本研究所の出展ブースを訪れた方々は、特に環境について興味のある方が多く、研究内容に関して多くの質問が寄せられました。中には企業の方からの質問や問い合わせ等もあり、産学連携による研究の可能性も感じられ、好評の内に終了しました。

去年は、洞爺湖サミットで地球規模の環境問題として地球温暖化が取り上げられたこと、温室効果ガスの削減目標を定めた京都議定書の約束期間の終了が迫っていることなどがマスメディアに取り上げられ、多くの人が改めて環境問題に関心を寄せていると思います。このような状況の中で、今後も「しずおか環境・森林フェア」に参加し、県民の皆さんと本研究所が環境問題について対話できたらと考えています。



本研究所の出展ブース

「海の世界と生物」をテーマに 静岡環境フォーラム21を開催

環境科学研究所 教授 坂田 昌弘

一般県民の方々を対象とした「静岡環境フォーラム21」が、環境科学研究所・地域環境啓発センターの企画で、1月10日(土)にB-nest静岡市産学交流センターにて開催されました。本フォーラムは、本学環境科学研究所に、静岡県環境衛生科学研究所と静岡県工業技術研究所を加えた県内三機関が主催する事業です。平成9年度より毎年開催してきましたが、昨年度からはそれまでの名称であった「環境研究交流しずおか集会」を改め、装いを新たにしました。

本年度はテーマを「海の世界と生物」とし、3人の先生方による下記の講演とパネルディスカッション(座長：坂田昌弘・本学環境科学研究所教授)が行われました。

- ①地球温暖化によって危機にあるサンゴ礁(講師：茅根 創・東京大学大学院教授)
- ②海と生物と地球環境(講師：橋本伸哉・本学環境科学研究所教授)
- ③海の世界にとって優しい魚の増やし方(講師：川嶋尚正・静岡県水産技術研究所富士養鰯場長)

本フォーラムには約70名の方が参加されました。パネルディスカッションでは参加者からの質問を中心に活発な討論が行われ、「海の世界と生物」に対する関心の高さを改めて知ることができました。また、アンケート結果からも、充実した内容であり満足できたとの意見が数多く寄せられました。なお、本事業は、静岡新聞社・静岡放送のご後援をいただきました。



会場内の様子

研究助成採択

■平成20年度厚生労働科学研究費補助金採択実績

< 本学教員が研究代表者である研究事業 >

研究者区分	所 属 名	職 名	氏 名	研究事業名・研究課題名
研究代表者	薬学部	講師	浅井知浩	研究事業名：医療機器開発推進研究事業 研究課題名：RNA創薬を支援するバイオイメージング技術の確立
研究代表者	食品栄養科学部	客員教授	米谷民雄	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：食品中残留農薬等の汚染実態把握と急性曝露評価に関する研究
研究代表者	国際関係学部	教授	石川 准	研究事業名：感覚器障害研究事業 研究課題名：多機能高精度自動点訳エンジンの開発
研究代表者	経営情報学部	教授	小山秀夫	研究事業名：長寿科学総合研究事業 研究課題名：介護保険施設におけるマネジメント理論の展開に関する実証的研究

< 他機関の研究者が研究代表者である研究事業 >

研究者区分	所 属 名	職 名	氏 名	研究事業名・研究課題名
研究分担者	薬学部	教授	出川雅邦	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：食品中の複数の化学物質による健康影響に関する調査研究
研究分担者	薬学部	教授	豊岡利正	研究事業名：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 研究課題名：違法ドラッグの依存性等に基づいた乱用防止対策に関する研究
研究分担者	薬学部	教授	山田静雄	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業
研究分担者	薬学部	教授	山田 浩	研究課題名：いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究
研究分担者	薬学部	講師	浅井知浩	研究事業名：医療機器開発推進研究事業（ナノメディシン研究） 研究課題名：ナノサイズリボソームを用いた急性心筋梗塞治療法の開発
研究分担者	食品栄養科学部	教授	大島寛史	研究事業名：政策創薬総合研究事業 研究課題名：多様な生理活性を持つ機能性成分の安定化による新たな難治性慢性疾患の予防および治療法の構築
研究分担者	食品栄養科学部	教授	大橋典男	研究事業名：新興・再興感染症研究事業 研究課題名：リッチケア感染症の国内実態調査及び早期診断体制の確立による早期警鐘システムの構築
研究分担者	食品栄養科学部	助教	増田修一	研究事業名：化学物質リスク研究事業 研究課題名：ナノマテリアルの遺伝毒性及び発がん性に関する研究
研究分担者	経営情報学部	准教授	藤澤由和	研究事業名：地域医療基盤開発推進研究事業 研究課題名：医療の発展と患者の保護をめぐる倫理・法の現代的課題に関する研究
研究分担者	経営情報学部	准教授	藤澤由和	研究事業名：地域医療基盤開発推進研究事業 研究課題名：院内事故調査委員会の運営指針の開発に関する研究
研究分担者	経営情報学部	講師	東野定律	研究事業名：子ども家庭総合研究事業 研究課題名：要保護児童における被虐待による問題や障害等の類型化
研究分担者	看護学部	准教授	奥原秀盛	研究事業名：がん臨床研究事業 研究課題名：WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究
研究分担者	環境科学研究所	教授	国包章一	研究事業名：健康安全・危機管理対策総合研究事業 研究課題名：飲料水の水質リスク管理に関する総合的研究

■平成20年度厚生労働省がん研究助成金採択実績

< 本学教員が研究代表者である研究事業 >

研究者区分	所 属 名	職 名	氏 名	研究事業名・研究課題名
研究代表者	食品栄養科学部	教授	大島寛史	環境化学発がん物質の曝露評価法の開発と発がんリスク評価に関する研究

< 他機関の研究者が研究代表者である研究事業 >

研究者区分	所 属 名	職 名	氏 名	研究事業名・研究課題名
研究分担者	薬学部	教授	奥直人	がん組織の特異性を利用したドラッグデリバリーシステム（DDS）薬剤の基礎的臨床の開発に関する研究
研究分担者	薬学部	講師	岩本憲人	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究
研究分担者	食品栄養科学部	助教	増田修一	新規発がん要因の検索とヒト発がんへの関与に関する研究

■その他の研究助成採択

平成20年度有限責任中間法人日本臨床薬理学会

研究者：薬学部 教授 山田 浩

研究課題：A Randomized Controlled Study on the Effects of Gargling with Tea Catechin Extracts on the Prevention of Influenza Infection in Healthy Adults

平成20年度財上原記念生命科学財団研究助成金

研究者：薬学部 准教授 阿部郁朗

研究課題：二次代謝酵素の潜在的触媒能力を活用した非天然型新規化合物の創出

平成20年度財島津科学技術振興財団

研究者：薬学部 講師 稲垣真輔

研究課題：官能基ごとに分類したメタボローム解析法によるバイオマーカーの探索

平成20年度財浜松科学技術研究振興会

研究者：薬学部 助教 鈴木由美子

研究課題：アミノ酸の環境調和型合成法の開発研究

平成20年度海洋博覧会記念公園管理財団調査研究・技術開発助成事業

研究者：食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則

研究課題：沖縄の未利用植物資源の機能的探索研究

平成20年度財ヤクルト・バイオサイエンス研究財団

研究者：環境科学研究所 教授 桑原厚和

研究課題：腸内フローラにより産生される短鎖脂肪酸の大腸機能に及ぼす影響に関する研究

平成21年度独立行政法人日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）

研究者：薬学部 教授 山田静雄（外国人研究者：Margot SKINNER）

研究課題：機能的食品の健康増進作用や疾病改善効果と医薬品との相互作用の検証

受賞

■臨床薬理研究振興財団賞学術論文賞を受賞

薬学研究科医薬品情報解析学教室の山田浩教授が、12月4日(木)から6日(土)まで新宿で開催された第29回日本臨床薬理学会年会において、臨床薬理研究振興財団賞学術論文賞を受賞しました。同賞は日本臨床薬理学会誌「臨床薬理」ほか学術誌に掲載された論文の中から、毎年優秀な論文に授与される賞です。受賞対象となった論文は、「臨床薬理」38巻5号pp.323-330「A randomized controlled study on the effects of gargling with tea catechin extracts on the prevention of influenza infection in healthy adults」であり、その内容は茶カテキンのヒトにおけるインフルエンザ予防効果をエビデンスレベルの最も高いランダム化二重盲検比較試験により検討したものです。本学の茶研究が臨床の領域でも高く評価された受賞と言えます。



山田浩教授

■2008年度O－C H Aパイオニア賞顕彰大賞を受賞

食品栄養科学部栄養化学研究室の横越英彦教授は、2008年度O－C H Aパイオニア賞顕彰の大賞を受賞しました。同賞は、世界緑茶協会が茶に関する優れた学術研究、緑茶の振興や発展に貢献した産業技術、緑茶のある豊かな生活文化の提案や消費拡大などで優れた成果を顕彰するものです。1月22日に静岡産業大学において石川嘉延会長（県知事）から授与されました。受賞の対象となったのは、「緑茶成分の脳神経機能に関する研究」で、緑茶特有アミノ酸のテアニン、及び、 γ -アミノ酪酸（GABA）の脳内神経伝達物質に対する影響や記憶・学習行動の改善、あるいは、脳波（ α 波）の放出頻度の促進からリラクゼーションや抗ストレス反応機序を明らかにし、また、多くの商品開発に貢献したことによります。



横越英彦教授

■電子情報通信学会 情報・システムソサイエティ活動功労賞を受賞

経営情報学部齊藤和巳教授は、電子情報通信学会より、情報・システムソサイエティ活動功労賞を受賞し、12月2日に機械振興会館（東京・港区）での贈呈式で表彰状が手渡されました。受賞理由は「和文論文誌編集委員・査読委員としての貢献」で、電子情報通信学会に投稿された論文に対して、特に多くの論文編集と論文査読を行ったことにより、学会運営の事業活動において顕著な業績のあったことが評価されました。



齊藤和巳教授

■第4回食と健康に関する新潟国際シンポジウムでポスター賞を受賞

薬学研究科博士前期課程1年の石川雄一さん（生物薬品化学教室、星野稔教授）が、11月29～30日に新潟で開催された国際シンポジウム 4th International Niigata Symposium on Diet and Health（第4回食と健康に関する新潟国際シンポジウム）でポスター賞を受賞しました。この国際シンポジウムは“食と健康”をメインテーマに新潟で行われており、今回は第4回目として、“健康増進・疾病予防に関わる食品機能”をテーマに開催されました。石川さんは「Daily Ingestion of Green Tea Catechins from Adulthood Suppressed Brain Dysfunction in Aged Mice」という演題で、海野、佐々木（都老研）、高林（県大短）、吉田、岸戸、井口、星野との共同研究の成果をポスター発表しました。発表内容は、加齢に伴う脳機能の低下には酸化傷害の増加が深く関与しており、抗酸化作用を有する緑茶カテキンの摂取により、ヒトの中高年に相当する月齢のマウスに対して、脳機能低下を有意に抑制できた、という内容です。国内外の研究者から高い評価を受けました。



中央が石川雄一さん

■日本腎臓学会・バクスター奨学金プログラムによるTravel Awardを受賞して、国際学会に参加発表

薬学研究科博士前期課程1年の加藤こずえさん（分子病態学講座）が、日本腎臓学会・バクスター奨学金プログラムによるTravel Awardを受賞して、小野孝彦教授のサポートのもと、Congress of American Society of Nephrology（米国腎臓学会総会、Philadelphia市開催、11月4～9日）に参加し発表しました。この賞は、米国腎臓学会に採択された腹膜透析関連の演題を発表する若手研究者を対象として、その渡航費用を助成するものです。Roles of coagulation pathway and factor Xa in the angiogenesis of rat peritoneal fibrosisという演題で、ポスター発表に対して口頭発表は6分の1という難関でしたが、口頭発表として選ばれ、うれしいと同時に当初は戸惑いの気持ちもあったとのこと。加藤さんは、今回の受賞について「グローバルCOE特任准教授のホーク先生のご指導で、英語での口頭発表に備え、グローバルCOEのiPodリスニングプロジェクトに参加するなど、英語の勉強に励むとともにスライド作製のご指導をいただきました。そのかいがあって当日は、学会出席者に理解いただける英語での発表ができたと思います。」と振り返りました。



壇上加藤こずえさん、手前右が小野教授

■日本食品科学工学会中部支部大会で一般講演者優秀者表彰を受賞

食品栄養科学部食品学科4年の市川達也さん（食品分子工学研究室）は、11月22日に名城大学で開催された平成20年度日本食品科学工学会中部支部大会において、「乳タンパク質カゼインによるカテキン類の酸化抑制」の演題で一般講演者優秀者表彰を受けました。この表彰制度は、日本食品科学工学会中部支部大会において一般講演者の中から最も優秀な口頭発表を行った若手研究者を表彰するものであり、市川さんの発表は、研究内容と発表スキルにおいて最も高い評価を受けました。



手前右が市川達也さん

■日本e-Learning学会 2008年秋季学術講演会で優秀賞と奨励賞を受賞

11月22日に開催された日本e-Learning学会2008年秋季学術講演会で経営情報学研究科修士2年渋谷良太さんが優秀賞を受賞しました。

論文題名：「客観的指標に基づく触診型手技の繰り返し学習支援システムの試作」
著者：渋谷良太・渡邊貴之・佐藤智子・岡本恵理・米柳誉洋・湯瀬裕昭・松浦博・青山知靖・鈴木直義

同じく、経営情報学部3年細澤あゆみさんが奨励賞を受賞しました。
論文題名：「動作実習教育における実習ブースでの動画レポート作成・添削システムの設計」
著者：細澤あゆみ・岡本恵理・佐藤智子・田中沙侑美・浅見龍太郎・酒井美那・青山知靖・鈴木直義



渋谷良太さん

細澤あゆみさん

活躍する卒業生・修了生

～ 食品栄養科学部・生活健康科学研究科編 ～

清酒醸造メーカーの研究所から

私は現在、清酒メーカーである黄桜株式会社の研究所に勤務しております。私たちの研究室を簡単に紹介しますと、清酒の原材料となるお米に関する研究や発酵の担い手である酵母に関するさまざまな研究を行い、これらの研究成果を基礎にして、新しい清酒商品の開発を手がけることを主な業務としております。その他にも、私どもの研究室では伝統的技術である醸造技術に科学的根拠を与えることによって、例えば、“杜氏（とうじ）”と呼ばれる技能者の優れた技術を解明し、そのすばらしさを皆さんに発信するような仕事にも取り組んでいます。

静岡県立大学を卒業してから17年の間に、お酒への社会ニーズは大きく変化しました。卒業時は、いわゆるバブル景気の真只中であり、好まれるお酒のタイプも香り高く華やかなものが主流でしたが、現在では、“健康”や“癒し”がキーワードとなるようなものに人気が集中しています。私個人の現在の研究テーマは、このような社会ニーズにあったお酒を開発することであり、そして、それに適合する

平成3年度食品栄養科学部卒業

現・黄桜株式会社研究所勤務 水間 智哉

原材料を調達し、それに適した醸造技術を開発することです。これらの取り組みは学術的にも高い評価を頂き、平成19年3月には京都大学から博士（農学）の学位を頂くことができました。発酵技術の妙により醸しだされる清酒の商品開発は、優れた原料米を見つけ出す作業と新技術の開発との地道な積み重ねであると考えています。これからも、広く社会にアンテナを張って、多くの人に喜んでもらえるようなお酒の開発を続けていきたいと思っています。



職場での筆者

卒業5年目を迎えて

こんにちは。私は現在、健診センターで事務として働いています。

就職活動時、研究所のある食品会社や、県外の会社など、様々な会社を調べました。就職してからも、検査部の技師さんと話をしたり、他の会社で就職した同級生の話を聞くにつけ、色々と思うこともありますが、自分なりに精一杯働く毎日です。

健診センターの仕事は、受付から検体の確認、入力されたデータのチェック、結果の発送といった一連の流れの他に、電話応対や会社との健診契約、医師のスケジュール調整などの業務まで、多岐に渡ります。特定健診制度への対処など、学ばなくてはならないことも山積みです。

特に各社によって福利厚生には大きな開きがあり、それぞれの健診のコースを別々に作成せねばならず、正直驚くほどの数です。採血のデータ一つとっても、必要に応じて項目を組んでおり、それらを見ながら、学生のときに学んだ基礎に感謝しています。

仕事先では幸いにも良い先輩方に恵まれておりま

平成15年度食品栄養科学部卒業

現・静岡赤十字病院勤務 森 裕香

すが、やはり休日に高校や大学時代の友人と会うことは大きな楽しみです。スキーや温泉旅行に出掛けることや、昨年始めたフルートも



中央が筆者

面白く、ドラムやピアノを習っている友人といつか一緒に演奏するのを目標に、休日は練習に勤しんでいます。もっとも音がかかなり騒々しいので、場所と時間には苦勞するのですが…。

大学で得た知識、人間関係ともに、今の私の支えになっています。

皆様も健康にお気を付けて、充実した学生生活を過ごされますように。

お久しぶりです

平成14年3月に生活健康科学研究科の博士後期課程を修了した望月和樹です。博士号取得後、アメリカのNIHに勤務した後、平成17年の秋より、縁あって再び出身研究室であり、合田先生が教授を勤められる栄養生理学の助教として赴任し、現在に至っています。

現在は、合田先生と一緒に、小腸の吸収細胞の栄養生理学を中心に体全体の栄養の代謝を研究しており、学部的重要性から疫学も行なっており、かなり幅広い研究を行なっています。そもそも、私は、静岡大学の理学部生物学科で、ゾウリムシや両生類の進化を研究していました。その後、栄養素・ホルモンなどの脂溶性因子のシグナル伝達機構に興味があり、この学部の大学院で栄養学を学んだ後、NIHでは、細胞周期ならびにクロマチンリモデリング因子の研究を行っていたので、今からすると、だいぶテーマをコロコロ変え、大変だったなぁ、と思います。しかしながら、現在の自分にとってすべて必要であったと今から思うといえるような気がします。と言いますのも、テーマを変えた分、統一的になにを行なったか、といわれると、うまく答えられないこ

失敗から学ぶこと

私は現在、香辛料メーカーである㈱ギャバンに勤務しております。私が在籍する関東事業所は平成18年10月より稼働開始した新しい事業所です。38,000㎡の用地に建設された当事業所は、国内の香辛料メーカーでは最大の規模を誇ります。私は新事業所メンバーの1人として品質管理室の立ち上げを行いました。ピーカー1つから何千万円もの高度分析機器までを選定・購入し、レイアウト構想や導入時対応を実施してきました。そして現在もそこでクレーム対応としての異物調査・解析や工程改善のための物性分析、品質の安定化を図るための化学分析等の業務を担当しております。

学生時代は食品化学研究室に在籍しトウガラシの成分について研究していました。「トウガラシ」という1つの香辛料について徹底的に追求する世界の中で学んだ知識や方法は、現在ありとあらゆる香辛料を取り扱う業務の中で応用されています。食品栄養科学部に入学する人達の多くがそうであったように、私も「食べる事が好き」「料理が好き」…ということから、何かしら食品に携わる職に就きたいと考え入学した1人です。その中でも「化学」の要素

平成13年度生活健康科学研究科博士後期課程修了

現・食品栄養科学部助教

望月和樹

ともありますが、新しい研究を始めようとするときに、必ず新しいことを勉強しなければならなかったためか、今では、新しいことにトラ

イするのが比較的苦ではなくなったかな、と思います。なんとなく、この大学で勉強をした人には、そういうことを思っている人も多いのでは？ と思ったりします。

今、科学者ならびに教育者の世界も、意識を変えなければ生き残っていけない時代になってきました。そんな生き残れる教育を県立大学で受けてきたのかな、とあらためて思います。もし、県立大学に寄ることがありましたら、ぜひ、栄養生理学研究室に足を運んでみてください。



研究室旅行にて（筆者は中列の右端）

平成14年度生活健康科学研究科博士前期課程修了

現・株式会社ギャバン勤務

奥田裕美



GABANブランドの香辛料

を重視したのは、一つには何よりも大学時代に「実験」「研究」の面白さを教えてもらえたことですが、「食品化学（もしくは調理科学）」に興味をもったきっかけは、中学生の時のある失敗によるものです。その失敗とは、チーズケーキを焼いた時に「砂糖を入れ忘れた」というとても初歩的なもの。それは味見をする前から見た目で「失敗」と分かりました。焼き色が良くない、そして何よりも肌理（きめ）が粗く型から取り出すときに簡単に崩れてしまいました。その時、「甘くない」だけじゃないの？」とハッとさせられました。料理においては“赤と青の絵の

具を混ぜると紫になる”というような単純な結果だけでなく、それ以外の何か…つまり「砂糖は焼き色をよくしたり、卵白等の気泡を安定化させたりする」など、科学的な変化が関係することが多くあります。今では当たり前理解できること、しかし失敗がなかったらそれを「なぜ？」と思うこともなかったかもしれません。「失敗から学ぶ」という言葉はなんだか理想論のように聞こえます。しかし品質管理業務の中で行う“実験”は、「起こってしまった失敗を再現させ、その原因を探ること」「失敗を予測して実証させ、そこに何が起こり得るかを検証すること」でもあります。今となっても周りを見渡すと様々な不思議が無数にあり、学ぶために失敗を繰り返す日々です。

まだまだ「活躍する卒業生」というには程遠い私がこのような原稿を書かせて頂くことは大変恐縮に思います。しかし一方で卒業してもなお大学との関係を持ち、今でもこのようなご依頼を頂けることは大変光栄に思います。食品化学研究室には今でも香料業界の中でお世話になる機会が多くあります。また新事業所立ち上げ時には分析機器の新規導入などの全く未知の世界で翻弄されていた中、数々のご指導を頂きました。今私が自分の望む仕事に就き、その中でやりがいを感じながら前に進み続けることができる背景には、大学で学んだこと、そこで得られた人間関係の支えがあることを切に実感しております。この場をお借りし、教職員の皆様、多くの先輩・同期の方々に感謝申し上げます。

★ 今回は、国際関係学部・国際関係学研究科編を掲載します。

研究者を目指して

※ このコーナーでは、研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介します。

ミカン産地からオレンジ産地へ

平成19年度薬学研究科博士後期課程修了

現・バーンハム研究所（米国フロリダ州）在籍 浦上 武雄

みなさんこんにちは、私は静岡県立大学薬学部を平成10年に卒業、平成12年に修士課程を修了しました。その後、国内の製薬企業に就職し研究員として4年間、新薬の研究に携わりました。その後何を思ったか会社を辞めてまた静岡県立大学薬学研究科博士後期課程に進学しました。博士の学位取得後に働き場を場所にこだわらず探した結果、時差14時間は地球の裏側に来ることになったわけです。人生分らないものです。

私は現在、米国フロリダ州オーランド市にあるバーンハム研究所（Burnham Institute for Medical Research at Lake Nona）で博士研究員、俗にいうポスドクをしています。オーランドは温暖な気候で、ディズニーワールドを初めとした観光産業、オレンジ、そしてNASAのケネディースペースセンターなどが有名です。この地を新たなバイオ産業の中心とすべくフロリダ州、オーランド市、投資家などが共同で多額の出資をして計画を進めています。まずは中核・基盤となる教育・研究施設（医学部、大規模病院、研究機関）を新設し、つづいてバイオ産業を誘致することで「メディカルシティー」を作ろうとしています。バーンハム研究所は非営利の民間研究機関でカリフォルニア州のサンディエゴが拠点ですが、一昨年この地に新たな研究所を立ち上げました。

私は現在がんと血管に関する基礎医学研究をしています。研究課題や目標の違いはありますが、こち

らフロリダと、静岡県立大学、企業での研究は基本的には変わりません。朝から晩まで研究室での実験・討論、一喜一憂の繰り返しです。世界中で同じ材料が手に入るのと同じことは日本にいてもできるでしょう。ではなぜ私がここで働いているかといえば、日本の研究とはちがう何かがあるとと思ったからです。実際この地に立つことで初めて見たことは多くあります。研究は人間で成り立っています。米国の作った世界中から研究者が集まって働くことのできる環境は日本とは大きく異なります。できる限り研究活動をサポートしようとする仕組みもあります。そのなかでみんな生き残りをかけ競い合っています。

私にとって静岡県立大学大学院で受けた研究・専門教育はここでの重要な基礎となっています。一般的に言えば日本の教育で得ることができる専門知識および技術は世界で通用するレベルだと思います。その点、語学力およびプレゼンテーション能力は日本の専門教育では学ぶ機会が少ないのは残念です。いかに良いところをアピールし悪いところを表に出さないようにするか英語を母国語とする研究者の卵たちは相当トレーニングされています。私は、静岡県立大学大学院COEプログラムの英語のプレゼンテーショントレーニングを受けましたが、今思い起こせば非常に有意義な時間であったと感じています。

こちらに来て日本の政治・教育・経済が以前よりも気になるようになりました。昨年、アメリカでは

大統領選挙が行われましたが、市民の政治・経済・教育に対する関心の高さと行動力には驚きました。違った視点から日本・静岡を見ると様々なものが見えてきます。現在多くの静岡県立大学出身の先輩方が世界で活躍していらっしゃいます。今後もぜひ多くの方々に挑戦して欲しいと思います。

最後に、フロリダのオレンジ、グレープフルーツは新鮮でとてもおいしいです。でも私は静岡のミカン、新鮮な魚、ウナギ、お酒、人々も大好きです。



Florida Blood Center（フロリダブラッドセンター）の前での研究所の人と（前列右から3人目が筆者）

卒業生によるキャリア講演会を開催

キャリア支援センターでは、OB・OGによるキャリア講演会を1月29日(木)に開催しました。当日は、平成4年に国際関係学部を卒業されて豊田通商(株)にお勤めの塚本淳一郎さんと平成13年に同じく国際関係学部を卒業され、現在フィンランド航空のCA（客室乗務員）をされている蔵屋千穂さんを講師にお招きし、それぞれのお仕事についてのお話をはじめ、お仕事観や働くことの意味から生き方についてまで、幅広くお話をいただきました。

塚本さんは、仕事に没頭することでその仕事のプロになることの大切さと自分の人生を自分自身で背負う覚悟を持って仕事をする必要性を説かれ、学生時代には一般教養を高めようとアドバイスされました。蔵屋さんは、とにかくまずやってみることや与えられた仕事に全力で取り組むことの大切さを説かれ、何をしたいのか分からない人は、自分がど

んな人になりたいのかをイメージし、そのイメージと現状の自分のギャップを埋めていくプロセスとして働くことを考えればよいのでは、とアドバイスされました。

開催日が試験期間直前だったのと、その他の行事と重なったこともあって、聴講者は50名弱でしたが、聴講した学生さんは一様に大変感銘を受けた様子で、講演終了後も多くの学生さんが長時間にわたって講師のお二人を囲んでお話をうかがっていました。そうした意味では、キャリア・就職意識の啓発とともに、OB・OGと在学生との交流という面でも意義深い会となりました。



蔵屋さん（左）と塚本さん

奨学寄附金をいただいた生塩さんに感謝状授与

本学に100万円の寄附をいただいた生塩幸雄さん（^{うしお ゆきお}静岡市清水区在住）に対して、12月26日(金)11時から、はばたき棟3階第2会議室において、鈴木理事長、西垣学長（当時）、木苗副学長（現学長）、府川副学長兼事務局長らが出席して、感謝状の授与式が行われました。

授与式では、鈴木理事長から感謝状の授与、お礼の言葉、西垣学長（当時）から記念品の贈呈などが行われ、生塩さんは長年お世話になっている本学や附属図書館のために少しでもお役に立てばとの気持ちで寄附したもので、このような式典をしていただき、かえって恐縮ですと話していました。

生塩さんは、10年以上本学の「社会人聴講生」として、薬学部や食品栄養科学部をはじめ幅広く講義を聴講され、本学の教育研究に深いご理解を示され、附属図書館も有効に利用されているとのことでした。

個人からの寄附金は珍しく、大変喜ばしいことです。



鈴木理事長（左）から感謝状を受け取る生塩さん

地域に貢献！学生による健康教室を開催

●食品栄養科学部 栄養学科3年 中道由佳奈

私たち、食品栄養科学部栄養学科3年生は、今年度も地域貢献活動として中高年の方を対象に11月20日(休)の午後に健康教室を開催しました。今年度のテーマは「生活習慣病予防」として、運動、講話、料理教室の3部に分けて実施しました。料理教室では、手軽に作れてヘルシーな料理を作っていただきました。献立を作成した後、何度も試作を繰り返し、参加者に満足していただけるような料理を考えました。私たちにとって、この健康教室は初めてのことであったので、緊張していましたが、参加者がとても熱心に取り組んでくださり、また参加者と楽しくお話ができて、とてもやりがいを感じました。参加者の方々から、楽しかった、よく理解できた、次回もまた来たい、などの感想をいただき、参加者にとっても、学生にとっても有意義な健康教室になりとてもうれしく思いました。来年も多くの方々に参加していただき、さらに地域の人々の健康増進に役立つものになっていくことを期待します。



手軽にできてヘルシーな料理のクッキング

●食品栄養科学部 栄養学科3年 多田こはる

講話では、運動の種類やその効果・方法について行いました。実際に対象者の方々に前にした講話で、非常に緊張しましたが、学内ではなかなか体験できないとても良い経験となりました。当日までは、実際の参加者の方々がどのような反応をされるのか不安に思っていたのですが、参加者の方々は私たちの言葉に反応してくださったり、クイズなどに積極的に回答してくださったりと、講話に熱心に耳を傾けてくださったので、話しながらとても嬉しく、また楽しく進めることができました。さらに参加者の方々から数多くの温かいご意見をいただき、社会で活躍できる管理栄養士を目指す私たちにとって大変励みとなり、意欲が湧きました。今回の教室を終えて、反省点や来年に向けての改善点などが明らかになりました。来年度も今年の反省点を生かし、後輩たちがさらに充実した健康教室を開催し、地域に貢献してくれることを期待しています。



講話の中でストレッチの紹介

●食品栄養科学部 栄養学科3年 杉山未咲

運動では『楽しくトレーニング〜!!』と題して、体育館で30分、音楽に合わせて体を動かしました。ウォーミングアップ、ウォーキング、筋トレ、ストレッチをゲームを交えながら行い、楽しく運動をしました。これらの運動を継続して行うことは、体の健康を維持したり怪我の予防に繋がるのでとても大切です。参加者から、「少しの運動、ストレッチで気分がすっきりした」「運動不足を実感」「今後は努力してウォーキングをしようと思った」「これからの人生、楽しく生きていくために、運動は欠かせないもの」等の感想が聞けました。運動の大切さを理解してもらえたと思います。これから体を動かすことを習慣づけてもらえたら嬉しいです。



参加者の方々と、体育館でレクリエーションを交えながら運動教室

3-A-Day実践・推進セミナーを開催して

食品栄養科学部 准教授 桑野稔子
助教 井上広子

昨年12月11日、社団法人日本乳業協会主催の「3-A-DAY実践・推進セミナー」を開催いたしました。このセミナーは、学生に対する健康づくりの動機付けと必要な知識の習得を目的とするものです。

セミナーは、第1部として、東京都リハビリテーション病院長の林泰史先生に「骨の栄養学」という演題でご講演をいただきました。第2部では、学生一人ずつ実際に骨密度測定を体験し、データに基づき、日本乳業協会の栄養士の方による簡単な指導をしていただきました。林先生のご講演と骨密度測定の体験を通して、多くの学生が自らの食生活について深く見直すきっかけになったものと思っております。今後も学生の健康と食生活支援のために、このような機会を設けていきたいと思っております。



骨密度測定風景

新学長就任



学長選考会議の選考に基づき、平成21年3月10日、木苗直秀氏（66歳、昭和17年10月12日生）が、静岡県立大学及び静岡県立大学短期大学部の学長に就任しました。

新学長の任期は、平成21年3月10日から平成25年3月31日までです。

■木苗氏の略歴

昭和45年3月 静岡薬科大学大学院博士課程修了
 昭和45年4月 静岡薬科大学助手
 昭和62年4月 静岡県立大学助教授
 平成3年4月 静岡県立大学教授
 平成15年4月 静岡県立大学食品栄養科学部長
 平成19年4月 静岡県公立大学法人理事、静岡県立大学副学長
 平成21年2月 静岡県立大学学長代行兼静岡県立大学短期大学部学長代行

教員の人事、名誉博士・客員教授の紹介

■教員の人事

●就任	(平成21年3月10日付け)		●採用	(平成21年2月1日付け)	
木苗 直秀	学長		山田 理絵	看護学部	助教
●採用	(平成21年1月1日付け)		戸敷 浩介	環境科学研究所	助教
紙屋 克子	看護学研究科	教授	●退任	(平成21年1月31日付け)	
東 達也	薬学部	准教授	西垣 克	学長	

■名誉博士

毛 江森	中国浙江省医学科学院名誉院長	陳 國神	中国浙江省医学科学院名誉院長
------	----------------	------	----------------

■客員教授

張 幸	中国浙江省医学科学院教授・院長	H.20.11.17～23.3.31	鄭 高利	中国浙江省医学科学院教授	H.20.11.17～23.3.31
沈 正栄	中国浙江省医学科学院教授・副院長	H.20.11.17～23.3.31	郭 潮潭	中国浙江省医学科学院教授	H.20.11.17～23.3.31

●教員の著書紹介●

「日韓交流スクランブルー各界最前線インタビュー」

大修館書店 全266頁 2008年11月刊行 定価1,890円

国際関係学部 教授 小針 進

1998年10月に日韓両国首脳が署名した「日韓パートナーシップ宣言」から10年が過ぎました。この変化の時期に、各界・各分野の日本人と韓国人（在日・在米を含む）が、日韓両国と両国関係をどう見てきたのでしょうか。「日韓交流」をキーワードにした各界の人々へのインタビューをもとにしたお話を盛り込んだのが本書です。その話者に対する筆者のコメントや筆者自身の日韓交流への視点を、さまざまなファクトやデータも織り交ぜて一冊にしています。「日韓友好万歳」を礼賛する提言の書ではありません。相手国に対しておもねるようなお話はなく、話者が日本と韓国にどう関わり、交流のあり方をどう考えるかというリアリティのある証言ばかりです。戦後日韓交流の隠れた秘話もあります。元総理大臣中曽根康弘さん、元大統領金泳三さん、前鳥取県知事片山善博さん、元文科省調整官寺脇研さん、「チャングムの誓い」女優・朴正淑さん、プロレスラー大木金太郎さん（故人）、タレント・ソニンさん、落語家笑福亭銀瓶さん、産経新聞ソウル支局長黒田勝弘さん、SBSアナウンサー鈴木通代さん、県大生の皆さんなど70名を超える人々の生の声から、日本と韓国の昨日・今日・明日を考えます。

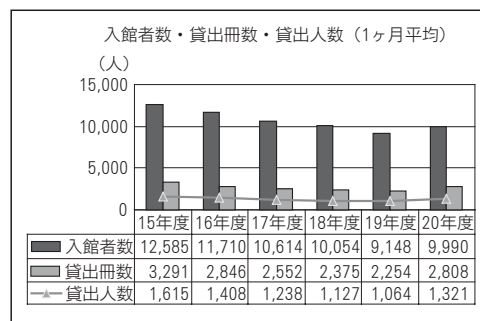


図書館だより

統計から見てくる図書館の利用状況の一部をご紹介します。

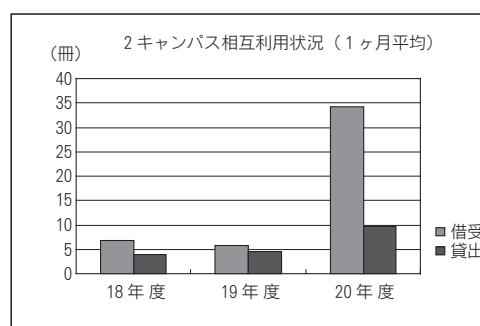
1 入館者数・貸出冊数・貸出人数推移

図書館の利用はインターネットや電子ジャーナルなどの普及により近年減少傾向にありますが、平成20年12月現在の図書館入館者数は8,341人、貸出冊数は25,272冊、貸出人数は11,892人、いずれの利用も昨年度より増加しています。また、貸出冊数と貸出人数は平成17年度より増えています。1ヶ月の平均利用状況を見ると、今年度の利用の伸びがよくわかります。(平成20年度のデータは12月までの平均です。)



2 2キャンパス間の相互貸借利用状況

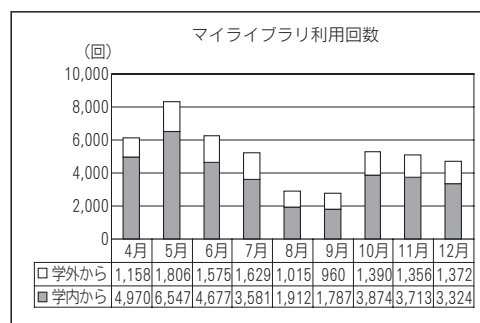
平成20年4月から図書館システムが新しくなり、図書館蔵書検索システム(OPAC)から県立大学と短期大学の図書を簡単に申込みることができるようになりました。また、図書は1週間以内に希望する図書館で取寄、返却ができるようになり、2キャンパス間の相互貸借は飛躍的に伸びています。平成20年4月から12月までに、県大が短大図書館から借りた図書は245冊で昨年の約5倍、県大から短大図書館への貸出は90冊で昨年の約2倍となっています。(平成20年度のデータは12月までの平均です。)



3 マイライブラリの利用

図書館の新しいシステムに、「マイライブラリ」の機能があります。

研究室や自宅からインターネットを通じ「マイライブラリ」へアクセスすれば、図書館へ来なくても資料の返却予定日の確認、貸出期限の延長、貸出資料の予約、本学にない資料の複写・借用の申し込み、本の購入希望(学部学科生・院生限定)をすることができる便利な機能です。平成20年4月から運用を開始し、1日の平均利用回数は平日163回、休館日20回と多くの方に利用されています。



《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、出版された先生方の著作の寄贈をお願いしています。

平成20年11月から平成21年1月までに図書館に寄贈していただいた先生方の著作は次のとおりです。

- ・岩堀 恵祐 先生(環境科学研究所)
『最新環境浄化のための微生物学』岩堀恵祐ほか著 稲森悠平編 講談社 (519/I 53)
- ・小久保 康之 先生(国際関係学部)
「単一欧州議定書と欧州会議」小久保康之著『日本E C学会年報 第7号』(333.7/N 77/7)
「ベネルクス3国と欧州統合の50年」小久保康之著『日本E U学会年報 第21号』(333.7/N 77/21)
- ・小針 進 先生(国際関係学部)
『日韓交流スクランブルー各界最前線インタビューー』小針 進著 大修館書店 (319.102/Ko 27)
- ・岩崎 邦彦 先生(経営情報学部)
『緑茶のマーケティングー“茶葉ビジネス”から“リラックス・ビジネス”へー』岩崎邦彦著 農山漁村文化協会 (619.8/I 96)
- ・西野 勝明 先生(経営情報学部)
「新公共経営(NPM)の課題と今後の方向」西野勝明著『県庁を変えた「新公共経営」：行政の生産性の向上を目指して』県庁編 時事通信社 (318.254/Sh 94)
- ・松岡 恵 先生(看護学部)
『妊娠から出産まで一ふたりで準備ー』川越厚、松岡恵著 婦人之友社 (598.2/ka 92)

シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。

紹介された図書は、県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、まだ読んでいない方は是非この機会に読んでみてください。また、すでに読んだことがある方には、あらためて読み直してみることをお勧めします。以前読んだときの思い出が呼びさまされたり、あるいはこれまで読んだ時とは違った新たな感動がみなさんの心に響くことと思います。

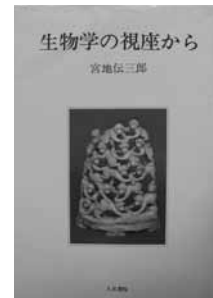
食品栄養科学部栄養生命学科 准教授 板井隆彦

紹介図書：『生物学の視座から』

著者名：宮地伝三郎編

出版社名：人文書院

図書館所蔵：閲覧室2階 480.4/Mi 75



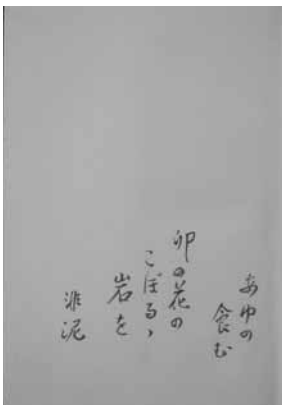
著者の宮地伝三郎先生は京都大学の名誉教授で、日本生態学会の創立に尽力され、初代の学会長となった方です。先生は東京大学理学部で動物学を修めて京都大学の臨湖実験所に赴任され、臨海実験所を経て理学部動物教室に移られ、退官後に（財）日本モンキーセンターの所長に就かれ、研究分野も陸水学から水生生物の生態学そして霊長類の社会学へと移された。著書も多分野にわたり、「動物の生態」、「アユの話」、「サルの話」（いずれも岩波書店）などがあります。

弟子の面倒見のよいいわゆる親分型の先生で、研究室からは多くの学者が輩出しています。私は先生の直接の弟子ではありませんが、先生の書かれた著書のうち約10冊を所有し、そのうち3冊は先生の銘がはいったいただきものです。先生の気配りは孫弟子にあたる私どもにまで及んだあかしです。ここで紹介するのはその1冊で、日本モンキーセンターからさらに（財）淡水生物研究所に移られた頃にまとめられたいささか古いエッセイ集で、銘には「あゆの食む卵の花のこぼる岩を 非泥」とあります。内容は研究歴を映し淡水生物からサルに至るまで多岐にわたりますが、じつは先生の研究遍歴や学習について考えたエッセイの存在が、とくに皆さんに勧める理由です。

先生の研究の遍歴や研究に対するお考えはエッセイ集の中ほどに納められています。「さまよえる生物学者」を自称された先生は、研究分野をできるだけ狭くしないように心がけられたようです。弟子にも、とくに研究者として当然メジャーな研究課題をもつほか、マイナーな課題をもつことが、観察や実験に携わる研究者にとって、研究が業務化して論文作成機に成り下がらないために必要と説き、勧めています。

学習についてのエッセイは巻頭に置かれています。霊長類の行動における学習の役割についての研究は先生の研究分野のひとつですが、エッセイではまず論語の「学而時習之、不亦説乎（まなびて時に之を習う、またよろこばしからずや）」を引いて、知的修得の発足としての「学」、それを反復おさらいして体得する「習」の違いをまずはっきりさせます。そしてヒトのような文化型動物の社会行動には生得的なものは少なく、ほとんどが生後の学習によって獲得され、しかも学習には快楽中枢の報酬系の快感ゆえにすべてに優先することが生じることを説明しています。学生や研究者が、学習し研究を進めていく上で、学習や研究の喜びがさらなる学習と研究の喜びを生み出していくことをこのエッセイは保証してくれているのです。

なお、先生は俳句もたくみで「俳風風土記」の著書もあります。俳句の非泥は最初に専門とされたHydrobiology（淡水生物学）のHydro-から採られたもので、先生は「ひどろ」と読んでもらいたかったようですが、研究仲間からはひどい俳句と揶揄されて「ひでえ」とよばれるようになったそうで、そのいきさつについてはあとがきに説明されています。



宮地先生自筆俳句

北京パラリンピックへの出場

堂森 佳南子（平成10年度 経営情報学部卒）

2008年9月、私はJAPANのウェアを着て、大勢の観衆と選手たちが集う「鳥の巣」に選手としてその場にいました。とても感動的な時間でした。

私は高校生の時、車いすテニスを始めました。県大卒業後、就職のため関東に引っ越してからは、車いすテニスの仲間も増えテニスの魅力にのめり込んでいきました。車いすテニスは、2バウンドまでの返球ができること以外は、通常のテニスとコートやボール、ルールも全く同じです。ラケットを持ちながら車いすも操作しなくてはならないハードなスポーツです。始めた頃は、ボールを追いかけることだけが楽しかったのですが、国内大会に出場するようになり、もっと高みに挑戦したいという気持ちが強くなりました。

4年前、「今一番やりたいことをやろう」と決心して、「2008年北京パラリンピック出場」を目標に挑戦が始まりました。まず、海外の国際大会に参加して世界ランキングを上げていく必要がありました。北京までの2年間は1年のうち約4ヶ月は海外遠征という日々でした。大会の申込や宿泊・航空券の手配・練習相手の確保などは、自分一人でやらなければなりません。もちろん日本にいる時は、仕事、練習の毎日でした。金銭的にも大変厳しい状況でした。しかし北京までの過程で得た様々な経験は、私の人生において何よりも貴重な財産になりました。そして目標に挑戦することのすばらしさを知りました。

北京での初戦は、シングルスが世界ランキング12位の選手で格上との対戦でした。序盤はかなり緊張しました。中盤から我慢のテニスで粘りましたが敗退。ダブルスはフランスとの対戦で、私はリラックスしたい緊張感の中で試合に臨むことができ、ダブルスは8位入賞を果たしました。

パラリンピックは特別な大会でした。メディアの対応や周囲の反応が大きく、障害者スポーツの認識を高めるという上で、とても意味のある大会であると実感しました。

北京出場は大きな自信となりました。しかし、またゼロからのスタートです。次回ロンドンではメダル獲得を目標にして、今後たくさんの課題を改善しながら、ロンドンに向けて日々努力していきたいと思います。

最後に、私が日々テニスに専念できるのは、家族・コーチ・友人・理解のある職場の方々のご支援があるからこそだと思います。心から感謝いたします。そして、これからも応援のほどよろしくお願いいたします。



女子ダブルス対フランス戦（本人写真右側）
大前選手（大阪市）とペアを組み8位入賞



閉会式前の海外選手との交流

サークル紹介

キャンドルナイトでスローな夜を・・・

環境サークルCO-CO代表 穂谷野瑞季

私たち環境サークルCO-COは自然を守ることを目的として自然保護・環境保全に関する企画を立案し自然保護や環境問題について私たちが出来ることを考えて、それを実践していくという活動をしています。

12月22日に私たち環境サークルCO-COが主催するイベントのキャンドルナイトが行われました。このキャンドルナイトは電気を使わずキャンドルの灯りだけで一晩過ごしてもらうことによりいつもとは違った夜を提供し、来ていただいた方々に少しでも環境問題について考える場になればいいなと思い企画を立案しました。プログラム内容は、廃油からリサイクルしたキャンドルを使ってのキャンドルアートや環境クイズそしてアコースティック部とアカペラサークルによるライブなどどれも素敵で楽しいものになりました。当日は多くの方々に来ていただき非常に嬉しかったです。このキャンドルナイトの成功を励みに今後も精力的に活動していきたいと思います。



キャンドルの矢印で来場者をご案内



キャンドルアートの中でスタッフや来場者のみんなと撮影

<漫画研究会>

漫画研究会です。

昨年末に東京国際展示場にて行われたコミックマーケット75に漫画研究会として参加しました。

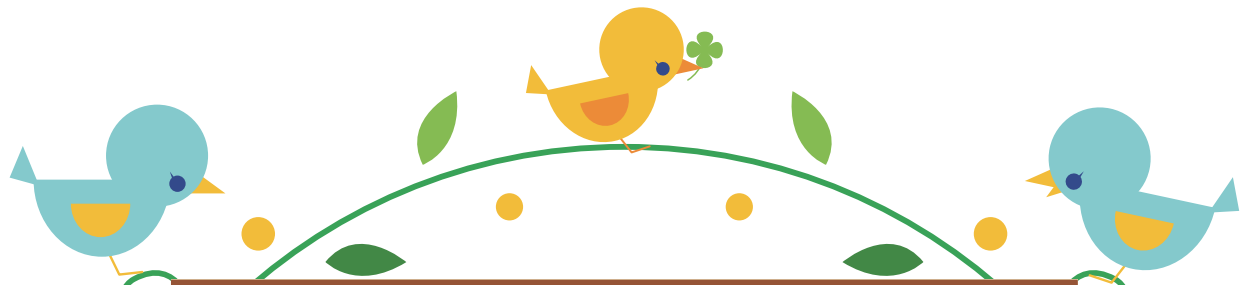
会場での撮影は出来ないので、右の写真は、同イベントで配布した冊子を持って校内で撮影したものです。



<The Vivaledge>

アカペラ部「The Vivaledge」です！！聞いたこともあると思いますが、アカペラとは楽器を使わずに自らの声だけでハーモニーを奏でる音楽です♪♪いわゆるハモネプです(´・ω・｀)

楽器もいない、何歳になっても出来るそんなアカペラに少しでも興味があったら是非！！ 活動は火曜日と金曜日の18時30分からで、食品棟3階デス☆階段上って左に曲がり、トイレ横の大きな部屋です(=° ω °)待ってます！！



新入生歓迎委員会の活動について

新入生歓迎委員会委員長 杉山 未咲

新入生歓迎委員会です。私たちは、新入生歓迎行事であるクラブ・サークル紹介、新入生歓迎パーティー、新入生バスハイクなどの企画、運営をしています。

また、入学時に新入生に配布される「草創」というパンフレットの作成や、開学記念行事第一部の運動会の企画、運営も行っています。約40名で活動していますが、委員会内は仲がよく、良い雰囲気です。

活動は10月から始まり、ミーティング、リハーサルを繰り返して、4月の本番を迎えます。毎年多くの新入生が行事に参加しており、「楽しかった」「参加してよかった」などの言葉を頂きます。この言葉を今年も多くの新入生から聞けるように私たちは準備を進めています。もうすぐ本番がやってきます。より完成度の高いものにするために、これからも頑張っていきます。



リハーサルの様子



剣祭ではおでんを販売

2009年開学記念行事開催のお知らせ

開学記念行事実行委員会

4月24日(金)に開学記念行事を行います。教職員、学生の皆さん、奮ってご参加ください。

第1部 運動会

9:20 受付開始 県大グラウンドに集合(雨天時 体育館)

第2部 新学長講演、卒業生等によるシンポジウム

15:30 大講堂

第3部 はばたきのつどい(交流会)

18:00 学生ホール

会費 教職員 2,000円(前売り券を販売) 学生 500円(当日会場で徴収)

第3部は第1部
第2部ともに参
加した学生は
会費無料!

学内広報誌「はばたき」への寄稿を大歓迎!

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。教育研究推進部・広報室(はばたき棟3階)宛にお願いします。

E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集: 静岡県立大学広報委員会(事務局 TEL 054-264-5130)
静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>